

第十六回

この向ひ居る侍の言ふやう、「（堀河殿が）東三条殿の官など取りたてまつらせたまひしほどのことは、ことわりとこそうけたまはりしか。おのれが祖父親は、かの殿の年ごろの者にてはべりしかば、こまかにうけたまはりしは。この殿たちの兄弟の御仲、年ごろの官位の劣り優りのほどに、御仲悪しくて過ぎさせたまひし間に、堀河殿御病重くならせたまひて、今はかぎりにておはしまししほどに、東の方に、先追ふ音のすれば、御前にさぶらふ人たち、『誰ぞ』など言ふほどに、『東三条の大將殿まゐらせたまふ』と人の申しければ、殿聞かせたまひて、『年ごろなからひよからずして過ぎつるに、今はかぎりになりたると聞きて、とぶらひにおはするにこそは』とて、御前なる苦しきもの取り遣り、大殿籠りたる所ひきつくる

ひなどして、入れたてまつらむとて、待ちたまふに、『早く過ぎて、内へまゐらせたまひぬ』と人の申すに、いとあさましく心憂くて、『御前にさぶらふ人々も、をこがましく思ふらむ。おはしたらば、閑白など譲ることなど申さむとこそ思ひつるに。かかればこそ、年ごろなからひよからで過ぎつれ。あさましくやすからぬことなり』とて、かぎりのさまにて臥したまへる人の、『かき起せ』とのたまへば、人々、あやしと思ふほどに、

『車に装束せよ。御前もよほせ』と仰せらるれば、もののつかせたまへるか、うつし心もなくて仰せらるるかと、あやしく見たてまつるほどに、御冠召し寄せて、装束などせさせたまひて、内へまゐらせたまひて、陣のうちには君達にかかりて、滝口の陣の方より、御前へまゐらせたまひて、昆明池の障子のもとにさし出でさせたまへるに、昼の御座に、東三条の大將、

御前にさぶらひたまふほどなりけり。この大将殿は、堀河殿すでにうせさせたまひぬと聞かせたまひて、内に関白のこと申さむと思ひたまひて、この殿の門を通りて、まゐりて申したてまつるほどに、堀河殿の目をつづらかにさし出でたまへるに、帝も大将も、いとあさましく思し召す。大将はうち見るままに、立ちて鬼の間の方におはしぬ。関白殿御前について居たまひて、御氣色いと悪しくて、『最後の除目行ひにまゐりてはべりつるなり』とて、蔵人頭召して、関白には頼忠のおとど、東三条殿の大将を取って、小一条の済時の中納言を大将になし聞こゆる宣旨下して、東三条殿をば治部卿になし聞こえて、出でさせたまひて、ほどなくうせさせたまひしぞかし」

第十七回

「そのほどは、夢ときもかむなぎも、かしこき者どものはべりしぞと

よ。堀河の摂政（兼通）のはやりたまひし時に、この東三条殿（兼家）

は、御つかさも停められさせたまひて、いと辛くおはしましし時に、人の夢に、かの堀河院より、矢をいと多く東ざまに射るを、いかなるぞと見れば、東三条殿に皆落ちぬと見えけり。

よからず思ひ聞こえさせたまへる方より、矢のおはせたまふは、悪しきことならむと思ひて、殿に申しければ、おそれたまひて、夢ときに問はせたまひければ、「いみじうよき御夢なり。世の中の、この殿にうつりて、あの殿の人の、さながら参るべきが見えたるなり」と申しけるが、あてざらざりしことかは。

また、その頃、いとかしこきかむなぎはべりき。賀茂の若宮のつかせたまふとて、臥してのみものを申ししかば「、うち臥しの巫女」とぞ、世人つけてはべりし。

大入道殿に召して、もの問はせたまひけるに、いとかしこく申せば、さしあたりたること・過ぎにし方のことは、皆さ言ふことなれば、しか思しめしけるに、かなはせたまふことどもの出でくるままに、後々には、御装束たてまつり、御冠せさせたまひて、御膝に枕をせさせてぞ、ものは問はせたまひける。それに一事として、後々のこと申しあやまたざりけり。さやうに近く召し寄するに、いふかひなきほどのものにもあらで、少し御許ほどのきはにてぞありける。

第十八回

「二郎君、陸奥守倫寧のぬしの女の腹におはせし君なり。道綱ときこえて、大納言までなりて、右大将かけたまへりき。この母君は、きはめたる和歌の上手にておはしければ、この殿（兼家）の通はせたまひけるほどの事、歌など書きあつめて、かげろふの日記となづけて世にひろめたまへり。殿のおはしましたりけるに、門をおそくあけたれば、度々御消息いひ入れさせたまふに、女君、

なげきつつひとりぬる夜のあるまはいかに久しきものとかはしる

いと興ありとおぼしめして、

げにやげに冬の夜ならぬまきの戸もおそくあくるは苦しかりけり

第十九回

（世継）「次の帝、花山天皇と申しき。冷泉院第一の皇子なり。御母、贈皇后宮懷子と申す。太政大臣伊尹のおとどの第一の御女なり。（中略）

寛和二年丙戌六月二十二日の夜、あさましくさぶらひしことは、人にも知らせさせたまはで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道せさせたまへりしこそ。御年十九。世をたもたせたまふこと二年、そののち二十年はおはしましき。あはれなることは、おりおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出でさせたまひけるに、有明の月のいみじくあかりければ、「顕証にこそありけれ。いかがすべからむ」と仰せられけるを、「さりとて、止まらせたまふべきやう侍らず。神璽・宝剣わたりたまひぬるには」と、栗田殿の騒がし申したまひけるは、まだ帝出でさせおは

しまさざりける先に、手づからとりて、春宮の御方に渡し奉り給ひてければ、帰り入らせたまはむことはあるまじくおぼして、しか申させたまひけるとぞ。

さやけき影をまばゆくおぼしめしつるほどに、月のおもてにむら雲のかかりて、少しくらがりゆきければ、「わが出家は成就するなりけり」とおぼされて、歩み出でさせたまふほどに、弘徽殿の女御の御文の、日ごろ破り残して、御目もえはなたずご覧じけるをおぼし出でて、「しばし」とて、取りに入らせおはしまししかし。

栗田殿の、「いかにかくおぼしめしならせおはしましぬるぞ。ただ今過ぎさせたまはば、おのづから障りも出でまうで来なむ」と、そら泣きしたまひけるは。

第二十回

「さて土御門より東ざまに率て出だしまゐらせたまふに、晴明が家の前をわたらせたまへば、みづからの声にて、手をおびたたしく、はたはたと打つなる。「帝おりさせたまふと見ゆる天変ありつるが、すでになりけり」と見ゆるかな。参りて奏せむ。車に装束せよ」と言ふ声を聞かせたまひけむ、さりとあはれにおぼしめしけむかし。「かつがつ、式神一人、内裏へ参れ」と申しければ、目には見えぬ物の、戸を押し開けて、御後ろをや見まゐらせけむ、「ただ今これより過ぎさせおはしますめり」と答へけるとかや。その家、土御門町口なれば、御道なりけり。

花山寺におはしましつきて、御ぐしおろしたまひて後にぞ、栗田殿は、「まかり出でて、大臣（兼家）にも、かはらぬ姿、今一度見え、かくと案

内申して、必ず参りはべらむ」と申したまひければ、「朕をばはかるなりけり」とてこそ泣かせたまひけれ。あはれに悲しきことなりな。日ごろ、よく「御弟子にてさぶらはむ」と、契りすかし申したまひけむがおそろしさよ。東三条殿は、もしさる事やしたまふと、あやふさに、さるべくおとなしき人々、何がしかがしといふいみじき源氏の武者たちをぞ、送りに添へられたりける。京のほどは隠れて、堤のわたりよりぞうち出でまゐりける。寺などには、もしおして人などやなし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを抜きかけてぞ守り申しけるとぞ」
